

校内研究計画

1 研究主題 「かしこい人」を育てる指導法の研究 ～言語活動の充実を通して～

2 主題設定の理由

(1) 教育的課題

少子高齢化・情報化・国際化が急速に進展し、めまぐるしく変化する社会情勢に加え、東日本大震災に関わる様々な不確定要素が今、子ども達の周りに溢れている。そんな状況の中で思春期を迎える子どもたちを指導する私たちには、これまで以上に変化する社会をたくましく生き抜く力の育成に取り組む必要がある。同時に、各種調査結果から読解力や記述式問題について課題があり、思考力・判断力・表現力を高めることも、全国的な課題となっている。

このような背景から学習指導要領には、「生きる力をはぐくむこと」や「生徒の言語活動の充実」が明記された。やまがた教育コミュニケーション改革でも、コミュニケーション力を育てていくことが重要であると示されている。また、米沢市学校教育の目標では、目指す子ども像として、「がってしない子ども」が示されている。これは、「おしょうしなの心」に代表される温かな心の育成を土台にした、心豊かなたくましい子どもの姿であり、そこには、困難な場面でも粘り強くあきらめずに挑戦することや、将来の夢や自分自身の生き方について志を持ち、それらに向かって努力しようとする、意欲を持ち続け、実践する子どもの姿も含まれている。

以上の点を踏まえた研究や実践が今、強く中学校に求められている。

(2) 本校教育目標との関わり

本校では学校教育目標を右記の様に定めている。また、教育スローガンを「友愛のもと自立と英知の旗を掲げよう(友愛・自立・英知)」と定め日々の指導を長年行っている。特に、友愛・自立・英知という言葉は教師だけでなく、生徒の活動でも意識されており、生徒会活動をはじめ多くの場面で使われ、取り組まれている。研究主題を設定するにあたり、生徒がこの目標に示された姿にさらに近づく手立てをとっていきたいと考えた。

学校教育目標 広い視野に立ち、主体的に行動する生徒

- 一 考える人
- 一 思いやりのある人
- 一 やり遂げる人

(3) 生徒の実態から

全校生へのアンケート結果

学習に対する意識は高く授業に真剣に取り組む生徒が多く、授業や学級で自分の意見を言う機会や相手の意見を聞く機会が多いと感じている生徒が多い。昨年度までの研究を通して、生徒達は多くの場面で言語活動を経験し、教師側も授業以外の場面を含めて指導を繰り返してきた。そのことは、相手の考えを聞き、自分の考えに活かそうという意識が高まってきた。しかし、自分の考えに自信を持つことができない生徒が半数ほどおり、発表場面で相手を意識することができないことも課題としてあげられる。

(4) 学力について

学習指導要領において学力とは「基礎的な知識・技能、知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力、学習意欲・学習習慣」の3つの要素で捉えられている。このうち、知識・技能を活用する思考力・判断力・表現力、学習意欲・学習習慣を生涯学び続けようとする意欲や方策を意味するところの「自己教育力」にまとめ、これに個性、自分らしさ・良さという新たな視点を加え、本校では学力を「i 基礎的な知識・技能 ii 自己教育力 iii 個性」の3つの要素で定義し指導にあたることとした。

(5) かしこい人について

生徒の実態から本校の教育課題は、生徒に自分の考えを声やことばにしたり、行動に移したりするための自信や勇気を持たせることであると考えられる。そこで、目指す生徒の姿を次のようにまとめ、かしこい人の姿と定義した。

- ・自信を持って自分を表現し、互いに認め合い励まし合うなかで、“学力”を高めるために努力する生徒
(主に学力の i 基礎的な知識技能, ii 自己教育力と関連)
- ・高まった“学力”を使える生徒
(主に学力の ii 自己教育力, iii 個性と関連)

(6) 言語活動について

本校の生徒を“かしこい人”に育てるには各教科の授業だけでなく、道徳、総合的な学習の時間、特別活動などの学校の教育活動のすべての場面で“かしこい人”を意識した指導が必要である。これは、自分の考えを話したり、相手の話を聞き自分の考えを高める等の場面を意図的、計画的に設定し、記録・要約・説明・論述といった学習活動を繰り返すことであり、言語活動を充実させることである。具体的には次のような場面が考えられる。

- ・体験から感じ取ったことを表現する
- ・事実を正確に理解し伝達する
- ・概念、法則、意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ・情報を分析・評価し論述する
- ・課題について構想を立てて実践し評価・改善する
- ・互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発達させる

このような学習活動は、生徒にとって自分を表現する場であり、活動の中で互いに認め合い励まし合うことが必要になる。また、その繰り返しの中で生徒が自信を高めていくことになると考えられる。さらに、各教科の授業だけでなく道徳、総合的な学習の時間、特別活動などで繰り返していくことは、高まった“学力”を使える場面を設定することである。

このようなことから、言語活動を充実させることで、自信を持って自分を表現し、互いに認め合い励まし合うなかで、“学力”を高めるために努力する生徒や高まった“学力”を使える生徒、つまり「かしこい人」が育っていくと考えた。

(7) これまでの研究から

○平成23年度 確かな学びを作る教育の推進 ～かかわりを活かした指導法の工夫～

生徒と生徒のかかわりだけでなく、教師と生徒、教師と教師、教材と生徒等様々な視点で研究が進められ、ICTの活用やグループ学習の実践等多くの実践がなされ、教師の指導力が高まってきた。

多くのかかわりに視点が広がったことで、ポイントを絞って研究を進めることが必要となった。

○平成24、25年度 かしこい人を育てる指導法の研究 ～言語活動の充実を通して～

・H24年度

多くのかかわりの形に共通する指導のポイントとして言語活動を取り上げた。また、生徒の実態を基に育てたい姿を考え主題を設定した。言語活動についての実践が数多く積み重ねられ、生徒も教師も力を伸ばすことができた。生徒の実態をアンケートで把握し、かしこい人について、各教科で目指すすがたをまとめ、来年度の授業改善に活かせる状態とした。しかし、指導案について、本校の研究がより分かり易いものにする工夫が必要である。

・H25年度

10月の米沢市公開研究発表会を中心に、日々の実践の中で授業改善を進めることができた。言語活動を意識した単元計画や授業を展開し、その中で生徒をかしこい人に育てていく実践を積み重ねた。本校でとらえる学力の3要素や目指す生徒像「かしこい人」の関係をまとめることができた。“個性”をどのようにとらえ、実践活かしていくかという点と生徒の実態や学力を再度分析し、言語活動をより一層生徒の力を伸ばす活動にしていくことが今後の課題である。

3 研究の概要

(1) 研究仮説

各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動など全教育活動の中で、学びを深める言語活動を行う場や手立てを工夫することで、さらに「かしこい人」が育つと考える。

(2) 研究の内容

①各教科での実践

- 各教科（授業）で、つきたい力を明確にし、効果的な言語活動を行うことで授業改善に取り組む。
 →言語活動をすることが目標ではなく、言語活動を通してその授業（場面）でつきたい力を伸ばしていく。生徒の主体性のある活動にするために、場面の設定・発問の工夫、学習形態の工夫、発表の型の指導をポイントとして、言語活動を取り入れた授業を展開し、教科を超えて日常から研究を深める。
 →単元を貫いて取り組む言語活動を設定する。教科で目指すかしこい人をもとに、その単元全体でつきたい力をつけるために、より効果的な設定を計画し授業改善を図る。
 →主な言語活動に対する評価規準を明確化し、授業の展開の中で評価を指導に活かす。

②道徳

自分とは異なる考えや新たな見方に接する中で、自分の考えを深め自らの成長を実感できるよう、自分の考えを基に、書いたり討論したりする等の表現する学習活動を充実する。

③総合的な学習

自分と地域の「ひと・もの・こと」とのかかわりについて、探究的な活動を通して、総合的に追及する方法を身につけ、そこにある問題を主体的に見出し、仲間と協力して問題を解決するとともに、自己の在り方や生き方を見つけようとするよう指導する。
 →学習発表会を縦割りのグループで全校一斉に行い、お互いの良さを高め合う。

④特別活動

行事や日常の活動で生徒が共通体験をしたことを基にして、自分の考えを語る、相手の考えを知る、認める等のシェアリングの場を機会を逃さず行う。
 →生徒の本音を引き出すような手立てを工夫する。授業を行う“学級”の中で心を開く体験を重ねることで、授業でも言語活動とあわせて、心を開いた活動が行える良いスパイラルが期待される。
 →儀式的行事や放送等の生徒の発表や報告場面で、生徒が自分の気持ちを表現する場を増やし、その内容や質が向上するよう指導し、表現することの意味や価値をより高い意識で捉えさせる。

※教科等で目指すかしこい人

国語	基礎的な言語力を鍛え、話す場・聞く場・書く場・読む場の中で、正確な理解力や適切な表現力・思考力を高め、生活の中に活かそうとする人。
社会	広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、平和で民主的な国家・社会の形成者として公正な判断ができる人。
数学	事象を数理的に考察し、習得した知識・技能や表現方法を用いて説明することができ、仲間の考えから自分の考えを再構築し、問題解決しようとする人。
理科	実験や観察の結果を科学的にとらえ、考察し、仲間と考えを伝え合う（交流し合う）ことで、より科学的な知識を獲得し、活用することのできる人。
音楽	多様な音楽表現の豊かさや美しさを感じ、仲間との関わりの中で表現の技能を鍛え、音と言葉で豊かに表現できる人。
美術	主体的に美術の活動に取り組み、仲間との関わりの中で見方考え方を広げながら、創意工夫し自分を表現しようとする人。
技術家庭	生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得し、その知識・技術を活用し進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度をもつ人。
保健体育	お互いに教え合い高め合う中で、健康や安全に対する知識・運動の技能を習得し、その態度や思考を日常生活の向上に活かそうとする人。
英語	基礎的な内容を理解し、話す・聞く・読む・書く言語活動を通して、自分や周りのことについて、より豊かに表現しようとする人。
道徳	資料を通しての内面化と他との関わりの中で自分自身を深く見つけ、高めようとする人。
特別活動	集団の中で自分の考えを語る、相手の考えを知る、認める等の自主的活動を通して、自己実現をめざす人。

総合的な学習の時間	問題の解決や探究活動で、体験したことや収集した情報を、言語により分析したりまとめたりする中で、学び方やものの考え方を身につけようとする人。
支援学級	話す・書く・聞く・読む等言葉を通した仲間との関わりを大切にする中で、自ら課題に挑戦し、最後までやり遂げようとする人。

→生徒の本音を引き出すような手立てを工夫する。授業を行う“学級”の中で心を開く体験を重ねることで、授業でも言語活動とあわせて、心を開いた活動が行える良いスパイラルが期待される。

→儀式的行事や放送等の生徒の発表や報告場面で、生徒が自分の気持ちを表現する場面を増やし、その内容や質が向上するよう指導し、表現することの意味や価値をより高い意識で捉えさせる。

③校内授業研究会・研修職員会議

5月、6月、11月の年三回の授業研究会と4月、8月の年二回の研修職員会議を実施し、研究の推進を図ると共に、研究を検証していけるよう工夫する。なお、6月には計画指導訪問と兼ねて行う。教科や学年にとらわれず、話し合いが行われるように、視点を絞って研究会を実施する。また、研究推進委員会を実施し、研究の推進、検証、情報交換を行い日々の実践につなげていく。

- ・5月 社会 数学 道徳
- ・6月 理科 英語 技術 道徳
- ・11月 数学 理科 音楽 学活

4 研究計画

月	方 策	研 究 内 容
4	研究推進委員会 職員会議 研修職員会議	・研究主題、研究計画の提案 ・研究主題、研究計画の決定 ・学習指導の原則を大切にした授業
5	研究推進委員会 第1回授業研究会	・校内授業研究会に向けて ・各教科で言語活動を単元の中に位置づけて実践を行う
6	研究推進委員 第2回授業研究会	・校内授業研究会に向けて ・言語活動を単元計画に位置付けて実践していく ・指導主事による指導、助言
7	研究推進委員会	・第2回職員研修会準備
8	研修職員会議 研究推進委員	・授業実践の紹介 ・2学期の授業実践の推進に向けて
9 10	研究推進委員会	・校内授業研究会に向けて
11	職員会議 第3回校内授業研究会	・指導主事による指導、助言
12	研究推進委員会	・研究の振り返り・検討 ・研究集録の編集準備
1	研究推進委員会	・次年度の研究内容等検討 ・研究集録の完成
2	研究推進委員会	・新年度の研究概要の検討